

原料は殆んどが缶詰にし、吾々が見たのは、革命五〇周年記念の缶詰であつた。

コンブは余り沢山はとつていないが、近年コンブと若干の野菜（主にたまねぎ）を混ぜた缶詰をサハリンサラダという名称で作つており、国民のなじみも徐々に高まつてきて生産も増してきている。

コマイは、トロールでもとるが、結氷する

地区では冬季に氷下網（氷の下に胴網を敷設する。道東で使用される氷下待網と異なる）を使用している。コマイは冷凍にして食用にするが、一般家庭では頭付きのまま油揚げして食べる。

（つづく）

## シシヤモ稚魚の飼育について(2)

増殖部 尾身東美

先号では一、シシヤモ稚魚の人工飼育に対する我々の心構と二、餌としてアルテミア（エビの一種）の子供を与えることとふ化後九十五日（六月十二日現在）全長十五mmまで飼うことが出来ることを書きました。それに続いて今回は稚魚の河川停滞時間を知る為に行つた実験の結果を報告します。この停滞時間を正確に知ることは受精卵の保管場所をより効果的なものに保つる場合、文今後予想される河川

濁からの産卵場の保護管理の上からなどいろいろの面で利用出来ると思ひます。

三、稚魚の河川停滞時間と生残りの関係  
先ずシシヤモ稚魚の河川生活の様子を知つて戴いた上で実験の結果を書きましょう。

この魚の受精卵が河川でふ化し親は海で生活すること、ふ化した稚魚は河川水（淡水）では長く生きられないこと、それ故、稚魚は

何時かは海に帰らなければならぬことは皆様十分承知と思います。では一体全体どの様にして、又何時頃海に下るのでしようか？

第一の点は稚魚を水槽中で観察すると、ある明るさの所に集まる程度の運動しかせず、ほとんど泳ぐ力を持ちませんので、河川から海への移動は河川の流れに身をゆだねて運ばれるものと考えられます。次に何時頃と云う点は従来より資源科が中心になて調べており、時期は四月下旬～五月下旬迄、五月中旬が盛期で、まだ腹に卵黄をつけた状態で河口附近にあらわれることが判つております。

ではこの様にひ弱な状態で海に押流され生き永らえることが出来るのでしようか？この様な急激な環境の変化に生理的に耐えることが出来るのでしようか？

以上の疑問を含め、稚魚期の生活を知る為に稚魚の河川に留る時間はどれ程かを実験的に調べてみました。

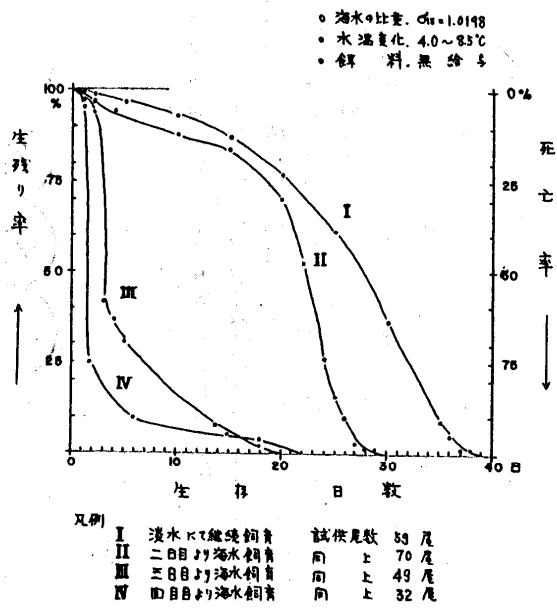
実験はふ化した稚魚を一定時間後に海水に移し、その後の毎日の生残り数を数える方法をとり、材料は昨年新釧路川で採卵、當場で保管してあつた卵よりふ化したものを使用、三月初旬より四月下旬にかけていろいろの条件下で実験を行いました。ここではふ化後一定時間後に直接海水（釧路港々外より運んだもので普通の海水濃度よりやや薄い）に移した

ものを例として挙げました。図は横軸に生き残った日数を、縦軸には最初の稚魚数に対する横軸の日に生き残つた稚魚の数の割合を生残り率）、及び死んだ数の割合（死亡率）を夫々%で示しました。曲線Ⅰは淡水のみで飼つたもの、Ⅱは二日目より海水に移したものの、Ⅲは三日目、Ⅳは四日目に移したものです。その結果、生き残り率の良いのはⅠⅡⅢⅣの順になります。しかしこの場合、稚魚が

どうしても海に帰らなければならぬこと、及び先号でも書いた様に餌を与えるなどしても淡水中ではどうしても四十日程より飼えなことを考えるとⅠは除いて考えなければなりません。そうするとⅡ、Ⅲ、Ⅳの順になり一日位の内に海に帰るのが一番効率の良い停滞時間となる訳です。

この実験は今回一度のものです故、これを最終の結論とするのは早計でしよう。たゞ従

シヤモ稚魚の河川停滞時間と生残りの関係



来、資源科で調べた新釧路川に於ける天然産卵場が河口から約二kmの雄別鉄道鉄橋より岩保木附近迄の十kmに亘つていと云う知見と稚魚のふ化時期に於ける河川の流速から考え合せるとこの結果が良く一致することが分ります。

それで、この結果が事実とすると、従来あちこちで設置されている受精卵の保管場所の中には再検討しなければならぬものも出てくると思います。即ち、保管場所が海水の影響下にある位置から遠いと析角ふ化した稚魚も海に到達しない内に死んでしまふと云う事態が起る訳です。又天然産卵場の内でもこれら再生産の為に適した所と、そうでない所があるはずで。

そんな訳で天然産卵場の正確な範囲を知ると共に、この様な稚魚の生理的面の知識に基いた正確な産卵適地を把握しておく必要があると思われまふ。これら一見漁業と関係がないと思われる実験でも人工ふ化事業の効果向上、河川汚濁に伴なう産卵場の保護管理など、いろいろ実面的面でも利用出来ます。

今後共シヤモ稚魚の飼育とそれに伴なう基礎実験を行いますので、この種の試験研究にも漁業者自身により一層の御理解を戴きたいと思ひます。